

渡 辺 道 場

——渡辺先生の思い出——

黒 沢 宏 和

私が初めて渡辺先生にお目にかかったのは、入学式後の学科オリエンテーションの時ではなかったでしょうか。確か、既に退職された植松先生と渡辺先生のお二人が新入生に履修の仕方や独文科のカリキュラム等を説明されたと記憶しております。

その後、1回生の後期に「語学基礎演習」、3回生では「語学概論」で先生の講義を受けました。月日の経つのは早いもので、あの時からかれこれ20年の歳月が経過したことになります。

しかし何と言いましても、私にとって渡辺先生の思い出と言えば、やはり大学院時代のことが強く印象に残っております。特に修士課程の2年間、独文の修士課程に学生は私一人しかおらず、ほとんどすべての授業はマン・ツー・マンで行われ、その上、私は欲張って週に7コマもの授業を履修していたものですから、予習は一方ならぬものでありました。中でも特に緊張を要したのが渡辺先生の講義でした。

表題を「渡辺道場」とさせて頂きましたが、私にとってはまさに学問のみならず、精神修養の場でもある「道場」そのものでした。

以下は、渡辺先生が関大の教育後援会の『葦』という会誌に「卒演の決め手は学力・精神力・体力」と題して寄せられたエッセーの一部ですが、当時の「稽古」内容を如実に物語っておられるように思います。

しかし前期課程の二年間は、さしも剛毅な彼にとっても地獄の日々であつたらしい。ドイツ語を基礎から叩き直す一方、表面的な知識ではなく言語史に即した真の言語理解に至らせるために、本気で叱り飛ばしたことも数知れず。(『葦』98号25ページ；1994年8月発行)

後期課程では、古典語、及び古高ドイツ語や古ザクセン語を教えて頂

き、その結果、歴史的視野に立って現代ドイツ語を研究する礎を築くことができました。

これらの古典語や古ゲルマン諸語に関する知識は、その後ドイツで初めてゴート語を学んだ時にも真価を発揮しました。学期初めには20名以上いた受講生（アジア人は私一人）が徐々にリタイアして行く中で、最後まで残り、筆記試験（Klausur）に合格し、単位（Schein）を認められたのは、たった二人でありました。この時、渡辺先生から受けた教えが、Germanistikの本場でも十分に通用することが分かりました。同時に、現在のドイツ人学生は古い時代のドイツ語にはあまり興味を示さず、日本人ゲルマニストでもこの分野でコツコツと地道にやり続ければ、ドイツでも認められるような研究ができる、という確信に至りました。この時、私の進むべき方向が決定したような気が致します。

このように、渡辺先生の御指導なくしては、現在の私は考えられません。先生のこれまでの御恩に、この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

渡辺先生はよく、「（データを処理する際に）多い、少ないという曖昧な表現を止め、具体的に数値で示しなさい」と指導されました。この一言に渡辺先生の研究のみならず、何事にも妥協を許されない厳しい御姿勢が現れていると存じます。

渡辺道場の門下生の一人として、このお言葉を真摯に受け止め、先生が推し進めようとなさった「古ゲルマン語の史的研究」を微力ながら前進させるべく、今後も教育・研究に地道に取り組んで行く所存です。